

アペルト14 原田裕規 Waiting for

2021年6月15日(火) — 10月10日(日)

金沢21世紀美術館 長期インスタレーションルーム

主催：金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]

協力：株式会社 Slacktide

《Waiting for》

2021

シングル・チャンネル・ビデオ (カラー、サウンド)

33時間19分26秒

作家蔵

朗読・編集・監督：原田裕規

CGIデザイン・アニメーション：孫君杰

リサーチ・音響編集：田中茜

協力：村松桂、西尾完太



オープンワールドゲームの製作に用いられる CGI (Computer-generated imagery) により、完全に人工的に作られた風景です。仮想のカメラがあてどなく彷徨い、100万年前、あるいは100万年後をイメージして作られた生命のない世界の断片を映し出します。

その中に響くのは、地球上に現存する全ての動物の名前を呼び続ける声です。2万種以上に及ぶ動物種名の朗読は、33時間以上にわたり、原田自身によってほとんどノンストップで行われました。

人から見た特徴や地名などによって構成される動物の俗名は、それ自体が人と自然の関係性を未来へ伝える「箱舟」のような存在であると作家は捉えています。遠い未来/過去を思わせる世界の中で、全ての動物の名前を呼び続ける声は、私たちには決して目にするのできない「風景」を想像させることになるでしょう。

《One Million Seeings》

2019

シングル・チャンネル・ビデオ (カラー、サウンド)

24時間5分21秒

作家蔵

アドバイザー：和田信太郎

アシスタント：中橋健一、村松桂

技術協力：コ本や honkbooks

撮影協力：KEN NAKAHASHI



原田は2017年より、不用品回収業者などによって回収された引き取り手のない写真を集め始めました。誰がいつどこで撮影したのかも分からず、所有者のいないこれらの写真群を、原田は「心霊写真」と呼びます。

本作品は、作家自身がこれらの写真と向き合い、「自身と写真との関係性が見出せるまで見る」というルールのもと行った24時間のパフォーマンスの記録です。手元の写真とその中の光景が「かつて誰かによって見られた」という事実をなぞるかのように、作家はひたすら視線を投げかけます。それは淡々と進む作業のように見えますが、集中、退屈、疲労といった身体的リアリティを伴うことで、ランダムに現れる世界の断片に対し、価値や体系を見出したり理解することの困難さを見て取ることができます。

※本作には、所有者や被写体が不明な写真が含まれていますが、関係者についての継続的な調査を行っております。

作家によるコメント

現代の「風景」はどんなものだろうかとずっと考えていた。伝統的な風景画は、高所から見下ろした構図で描かれることが多い。しかし今となっては、単に高所に視点を設定しただけでは、「現代」という時代を俯瞰することはできないだろう。

それでは、その視点はどこに設定されるべきだろうか。そのために試みたことが、《Waiting for》(2021)における「地球上に存在する全ての動物の朗読」と「あらゆる動物がいない光景(=100万年前/後の光景)」のビジュアルイズだった。

まずはいくつもの資料をかき集めて、学会や研究機関にも確認を仰ぎながら、膨大な動物の和英俗名をリスト化する作業から始めた。なんとか完成させた2万種以上の俗名リストの朗読には、少なくとも30時間以上を要することもわかった。

それらを俯瞰するひとつの「視点」をつくるために、当初は切れ目なくノンストップで読み上げを行う必要があると考えていた。しかし実際に朗読してみると、疲労、眠気、読み間違えなどにより、朗読は何度も失敗に終わり、最終的には、20時間と10時間の2回にわけて収録した音声を作品にすることにした。

そう決断したのは、このときに人間の身体の有限性について改めて強く実感させられたからだった。この朗読では、まるでコップの水が溢れるように、多すぎる情報や身体的な負荷など、演る者にとっても観る者にとっても、常に何かが手に余る状態が続いている。この何かが溢れた状態にこそ、ちっげきな人間には推し量ることのできない「風景」と呼ぶべき何かが立ち上がるのを実感したのだ。

それと同じ意味で、《One Million Seeings》(2019)でも常に何かが溢れている。

この作品で行った、24時間にわたり延々と写真を見続けるパフォーマンスは、体力・認知ともに人間の限界を越えるものだった。次々と現れる詳細不明の写真を見続ける作業は、イメージを人間の側に引き寄せて都合よく解釈する作業ではなく、いわば、人間の身体をイメージの側に引き寄せて新たな関係性を築こうとする作業である。

人間(=身体)ではなく、人間以外(=イメージ)の視点に立つこと。それがこのふたつの作品が共有する倫理であり、現代の風景を出現させるために必要な態度であると思う。

「Waiting for」という展覧会/作品タイトルには、人間の想像力を超えた空間的・時間的広がりに対して、作者が手綱を握ろうとするのではなく、善悪も清濁も含んだところで待ち、その有り様を最後まで見届けたいという思いを込めている。